

■第36回院内集会を開催しました

10月23日(木)午前11時から参議院議員会館B107号室にて36回目の院内集会を開催しました。今回は元東電社員でAFW (Appreciate FUKUSHIMA Workers) 代表の吉川彰浩さんをお招きしてお話を聴きました。AFWは「原発現場の理解促進と作業員の労働環境、生活環境改善のための支援」「次世代に託せる地域づくりと産業の振興」「次世代と向き合い、次世代をはぐくむ活動」を理念に活動を進めています。吉川さんの経歴については行動隊員・賛助会員全員にお送りした院内集会の案内状に詳しいので、そちらをご覧ください。ちなみに吉川さんは1980年生まれ、われわれから見ればまばゆいばかりの活力にあふれる若者です。

講演では、事故の前と後とでの福一の作業内容と作業員の逆転的な質的变化、避難地域の現状とその外側で日常生活を営む人々の暮らしを情感こめて語り、「正しく福島県のことを知り、正しく発信してもらいたい」「原

発作業員の苦勞をしのび、感謝の念を伝えたい」「東電発表を専門的に評価できるベテランの皆さんの力を貸してもらいたい」というお願いで結んだ講演は、過酷な状況に日々接する生身の人間の感覚に裏打ちされたりアリティにあふれるものでした。ときに挑発的になる言説はホットにしてクールな心情の吐露であり、われわれ老人集団にとっては良きカンフル剤、これからの行動隊の在り方を考えるうえでも示唆に富む院内集会になったと思います。(H記)



■私たちに手を貸して下さい

吉川彰浩

皆さんお早うございます。

福島県は今どういう状況か。笑顔があふれ、子ども達が走り回り、大人達は復興に向かって頑張っている。私は現地にいて本当にそう思います。たくさんの悲惨な状況はありますが、3年半前に比べると大変良い状況になっています。しかし、それと比べてはいけないうちがあるというお話をまず最初にしていきます。



福島県の言葉で海側の地方のことを「浜通り地方」と言います。いわき市から北の8市町村は双葉郡と呼ばれ、三年半経った今でもまだ住むことが許されていない地域があります。そこで見られる風景というのは雑草だらけの田畑、屋根瓦の落ちた家屋です。ただ、避難区域の境界線上の町、楢葉町や南相馬市、浪江町の海側と北側では比較的線量が低いので、日夜沢山の方が出入りし、おそらく写真で切り取った際には、どこにでもある田園風景に写るはず。今日はこの双葉郡の話をしていきます。

原発行動隊の講演会ですので、作業員の方を中心としたお話をしたいと思います。

●作業員の構成が変わった

世の中に伝わっていないとても大切な情報があります。震災前と後とでは働く人の構成が変わっているということです。

震災前、原発作業員と呼ばれる方々の主な仕事は点検修理でした。運転状態を安全に保つ設備を維持するための仕事です。

「定期検査」は1年に1回、2、3ヶ月かけてやる総点検で

す。実はその総点検以外に「定例点検」というものがあり、一年を通じて仕事量があります。原子炉を止めなくても点検できる機器が該当します。

「原発ジプシー」という言葉がありますが、あれはもう時代錯誤の言葉です。ほとんどの原発作業員の方は、発電所の立地町村に住まわっていました。あり余る仕事がありますから、わざわざ他県まで行って仕事をしなくても、そこで生活できる。

しかし震災後どうなったか。作業員の中身が逆転しました。今いちばん多いのは建設系の企業さん。

震災前、新しく設備を作る仕事はほとんどありませんでした。建設系の方もいらっしゃったんですが、発電所の外で、一般の土木業、建設系の仕事をされていました。

震災後、どうして逆転したかといいますと、運転することができなくなりました。点検修理は原子炉を運転するためにやっていたわけですから、運転しないことになれば点検修理はなくなります。その結果、点検修理系の企業さんのお仕事は全くななくなってしまいました。代わって、瓦礫の撤去、建屋カバーの建設、4号機の燃料取り出し用の建屋建設などの作業があり、建設系の方々の出番になったんです。それでも、全体の仕事量は以前と比べて大変少なくなっています。

作業員の方の人材流出の根本原因はここにあります。仕事がない。生活していけない。皆さんが30代、40代の頃、自分の会社の仕事が全くなってしまうたら、ほとんどの方はやめますよね。家族を守れないから、生活していけないから。私の身近でも、仕事がないからやめていった作業員の方々がたくさんいらっしゃいます。

●現場の作業員の質が変化した

原発作業員は地元に着して仕事をされていた方々で、知識も教養もありました。私は新入社員教育もやって

いたんですけれど、「身だしなみや言葉遣いは協力企業さんを見習いなさい」と言っていました。こうした人間性も素晴らしい、知識も経験もある方々がいなくなり、代わって建設系の方が大勢入ってきます。

はっきり申し上げます。原子力発電所の仕事に入って欲しくない方々がたくさんいらっしゃいます。全員がそういうわけではありません。割合として、モラルの低い、技術も知識も低い、原子力産業に新規に入った、トラブルが起きても当然と言われてもしょうがない労働者の方々がたくさんいるということは頭に置いておいて下さい。

●被ばく線量

もうひとつ大きな問題があります。原子力作業従事者として非常に重要な人たちが、原発事故直後に常軌を逸した被ばくをして初期被曝線量が非常に高いんです。原発行動隊が発足された理由がまさにそれですね。5年で100ミリシーベルトという基準値がありますが、それをあつという間に越えてしまっている。最初の3ヶ月で越えてしまっている方々もたくさんいます。中には100ミリ、200ミリの方もいる。私の友人で最高で800ミリなんていう方も。その方々は5年経たないとリセットしません。「仕事がなくとも俺はこれからの福島第一のために残るんだ」と言ったところで、作業現場に入れないという問題があります。

●作業員の多くは被災者

原発周辺に住まわれてましたから、多くの方が原発事故の被災者で、避難生活を送ってらっしゃいます。こうした方々に「辞めないで」と言うのは非常に難しいです。働く人にとってみれば、仕事がない、大変高い線量を浴びた、避難生活もされている。辞めるなという方が酷です。

ひどくやつれた顔をして街を歩いている作業員の方とお話をすると「まだがんばれる」「応援してくれる人もたくさんいるから」とおっしゃるんです。

●作業員教育が大きな課題

建設系の方は非常に重要な人たちです。瓦礫の撤去、大型クレーンが入っての建屋カバーの撤去など、ああいった作業は原子力産業の人間に扱える代物では全くありません。

彼らの何が悪いのかと言えば、それは単純に原子力作業において「学んでいない」「経験が浅い」ということだと思います。

原子力産業で長いこと働けば実はモラルがものすごく高くなるんです。自分の作業現場でトラブルがあった場合、社会的なインパクトが高い。「迷惑をかけてしまっている」という思いが生まれてきます。ルール、手順をしっかり守って作業する。

私たちにできることのひとつとして、今たくさんいらっしゃる建設系の方々に対して教育の場を作るということがあるのではないのでしょうか。

震災前、福島第一原発の入口には、技能訓練センターがありました。これは社員も作業員の方も学べる場です。非常にクオリティが高い。実際と同じ設備を扱いながら、経験と知識を学べる場所でした。しかし事故があってから使われておりません。

今、働く方々への教育は各請負企業さんにお任せになってしまっています。現在の東京電力は新しく何十億円もかけてそうした取組をすることができない状況にあります。

建設系の方々のトップは大手ゼネコンです。大変なお金を持っています。社員教育の責務もあります。しかし実際やれるかといったら、ご想像の通り、できませんよね。

原発行動隊の方々は、体力面は別として、経験・知識・技

術といった面においては私たち若い者は皆さんの足元にも及ばないはず。原発行動隊の方は労働力として発電所に入れない。でもできることはあると思います。後進を育てる、若い者にレールを敷いてあげる、これができたら現場はすごく変わると私は思っています。

原発作業員という言葉がありますけども、決して一括りにしないで下さい。二通りの系列の方がいらっしゃる。建設系の方々と点検修理をする人たちと。もう少し言いますと、地元に住んでいた人、他県から来た人。それぞれ、抱える問題が違うということを知っておいて欲しいのです。

●作業員が抱える問題

作業員の方が抱える問題を列挙してみました。

「住む所、ありません、避難生活をして下さい」「避難されている方がたくさんいますから避難場所も自由に選べません。空いてるところを自分で探して下さい。通勤に便利な所に住みたいですか。残念ですが選べません。」「申し訳ないけど、皆さん、ラブホテルに泊まって下さい」（昨日、私、広野町に行ったんですけど、ラブホテルが作業員の宿になっていました。）「（震災直後の過剰被曝で）将来の健康不安を抱えて仕事をして下さい」「5年間で100ミリしか浴びれませんから、一杯浴びた人は現場は入れません。事務仕事をやって下さい」「放射能について偏見があります。結婚が破談になったりお付き合いが駄目になることも起こりますので肝に銘じておいて下さい」「点検修理の仕事がないので、皆さんの会社は非常に経営が苦しいです。いつ倒産になるかわかりませんが、頑張ってください」「会社が儲からないので危険手当を減らします。皆さんのお給料も減らします」「社会からホームレスとか反社会勢力と思われるので、町の人からそう思われても頑張ってくださいね」。

どれも頭にくるような内容ですね。どれ一つ取っても、それだけでやめる大きな理由になっています。3年半経った今でも続いている作業員の方々が抱える問題です。

●被ばくの問題

原発行動隊の皆さん、注目して下さい。事故直後には過剰被曝による放射能不安はありましたけれども、今では、作業することによって被ばく積算量が増えて放射能不安が出ることはないんです。シンポジウムで増田さんが発表されたと思いますが、発電所構内の1ヶ月あたりの被曝積算は0.8ミリ・シーベルトまで下がっています。原子炉内部の線量が非常に高い所については、人が入って働ける状態になるまではロボットを使い、人を入れないことになっています。

今後、デブリの取り出しが始まります。「非常に高い被曝をするだろう」というのは現地を知らない方の話です。いちばん被ばくすることになる作業員、東京電力社員にとってみれば、安全に働ける環境を創り上げることが命題です。彼らはデブリが危険なことは当然知っている。危険な状態のまま、被曝しながら作業をするなどという後ろ向きなことはやりません。働ける環境を作り、被曝線量を下げるという取り組みがもう始まっています。

●誰が問題を解決するのか

作業員の方々が抱える問題は、言うまでもなく、個人で解決することができません。で、それを誰がやるか。

「東京電力がやりなさい」。世間の一般論です。私はここは間違っていると思います。

福島第一原発が非常に不安定なまま今後続けば皆さんの生活はどうなるのでしょうか。福島第一原発で働く方々が守られない状況を放置することは、皆さんのお子さんやお孫さんに問題をそのまま託すということです。自分の子ども



に「お父さん、原発事故から何年も経ったのに、なんで働く人の環境、地域に住んでいる人の生活環境は良くなってないの？誰もやらないんだったら俺、高校卒業したら大学には行かずに原発で働くよ」なんて言わせたいでしょうか。私たちは今試されています。問題があるのであれば、みんなで力を合わせて解決に向かえばいい。

私は東京電力をやめて最初の一年間、原発作業員の方が抱える問題について社会へ発信しました。でも何も変わりませんでした。さらに一年経って高校時代の友人と団体を立ち上げました。三人で、「もう口だけのことはやめましょう」と。福島県双葉郡で根を張って、地元の方の生活を見直すんだと。

●インフラの再建が第一の課題

地域での暮らしにくさは原発作業員の方の抱える問題にも直結しています。住むところがない、スーパーがない、娯楽がない。双葉郡の復興事業と原発作業員の方を守るということは正にリンクしていて、原発作業員の方が安心して働ける環境というのは、発電所の外に必要です。

東京電力と政府に任せて、「あれやれ」「これやれ」と。3年半経ってどうなったか。

原発作業員の方の拠点となっている広野町では、「いつになったらうちの町にはスーパーできんの」といった声が上がります。ここです。破壊されたインフラ。スーパーや病院がない、娯楽施設がない。こういったことは民間で解決できることです。

通勤にも問題が起きています。朝早く起きて、通勤2時間半かけて福島第一原発に行きます。帰りも2時間半。一日5時間も通勤にかかるんです。作業員の多くは単身赴任です。家族で住む環境がないからです。お父さん一人でがんばっています。

自衛隊の方が御嶽山に救助に行かれましたよね。大変厳しい状況の中でがんばれる理由は後方支援がしっかりしてるからなんです。政府行政がしっかり拠点を作ってくれて、社会全体が認めてくれる。それがあからこそ、自衛隊の方はあんなにも辛いことを一生懸命やって下さる。福島第一原発の事故も似たようなものだと思うのですが…。

●民間の力が必要

地形がわかる福島県の地図を見て下さい。山ばかりです。双葉郡の地域を見て下さい。平地は少ししかありません。西は山、左側は海。そして海岸沿いは断崖絶壁。

双葉町、大熊町も小さな田舎町の行政です。震災前はそれでよかったんです。震災後、町の復興にしろ、除染にしろ、小さな町の行政に任せっきりになっています。

東京電力は、福島第一の構内のことしか基本的にできませんから、東京電力に「スーパー作れ」などと話をしても仕方ありません。東京電力には一所懸命、発電所の中のことをがんばっていただきたい。そこで民間の出番です。でも福島県の浜通りには大都市にあるような大きい店は全くありま

せん。個人経営です。原発の事故の被災者なんです。「民間がんばれ」と言いたいのですが、福島県の外の皆さんに訴えているんですね。これはある意味チャンスだと思います。何もないんですから。そこで始めれば、その会社は形成戦略さっしかりしていれば成功します。東京電力と行政に任せるのではなく民間も含めて一体となって取り組むべきです。

●AFWの取組

私たちAFWは取り組むことにしました。今広野町を拠点としています。町役場さんに「元東京電力社員です」と申し上げてお話ししました。最初は全く相手にしてもらえませんでした。毎日役場に通ううちに話を聞いて下さるようになり、その次には一緒に改善に動いてくれています。

私はJビレッジに出入りしてます。何しに行くかという、原発作業員の方に支援物資を送るって言う活動を一度やったことがあるんですけども。その支援物資の受け入れとか配布っていうのは東京電力さんの力を借りないとうしてもできない。

いたずらに東京電力を攻撃することはなんの解決も産みません。むしろ共通のゴールに向かって手を結び、協力し合う事の方がよほど効果的です。「元社員でした。話を聞いて下さい」。正面突破で何度も足を運んだときに、人は心を開いて「趣旨は分かった。協力するよ」と言ってくれる。今はJビレッジに行けば、増田さん(廃炉推進カンパニープレジデント)、石崎さん(東電福島復興本社社長)と「どうすれば良い方向に行きますかね」と直接お話ができるまでになりました。

●人々に寄り添う取り組みを

NPOではなく、その地域に住んでいる方々と町の復興に取り組んでいます。NPOの方はいずれ問題が解決されたいなくなるんです。そしてNPOがやってることはNPOがやりたいことなんです。町の方々はただの田舎町の普通のおじいちゃん、おばあちゃんです。何か特別な考え方、取り組みができるかといったら、できません。そのできないことを叩くんではなくて、寄り添っていく。彼らがやりたいことを大きくする、手伝うことが必要だと思ってます。

実際何をしてるかといいますと、広野町でオリーブの栽培を始めました。オリーブはセシウムに強いんです。植えたオリーブから採った実を検査したところ検出限界以下という結果が出たんです。稲作しかない地域に新しい産業の取り組みとして、町の人々が始めたんです。元消防士さんです。そんな復興の取り組みをやったことがないですから、私は会長さんに直接話を聞きに行って一緒にやりましょうと。私が広野町に戻れば、作業服着て、頭にタオル巻いて、土いじりばかりやってます。

町を愛する、この町に生きていくという人たちがやりたいことを後押ししながら、町の発展に寄与して、その先には人が集まり、お店ができて、賃貸住宅も増えて、作業員の方が生活する基盤が整うかもしれない。そういったことも考えています。また、来年ぐらいから、子供たちを笑顔にする大きな事業が始められます。

●正確な情報発信を

皆さんに、お願いしたいと思います。福島県のことを正しく知って、正しく発信して下さい。福島県は悪いことばかりではありません。先週、B-1グランプリが開催されています。たくさん笑顔があつたんです。そういった良いことも悪いこともフェアに行きましょう。福島県が悲惨であればいい、センセーショナルなことだけ取り上げればいいといった3年半をもう卒業してですね。第一原発事故だけを

語るのではなくて、そこで生きる人たちに思いを寄せて、正しい情報を正しくお伝えしていただければと思います。

今日ある方が言いました。「一号機のカバーの撤去が始まる。放射能が飛散する。東京も危険だ」。しません。穴を開けて、飛散防止剤を上から入れていますから。東京になんて飛来してくる訳ないんです。

原発作業員の方々のご苦労というのは皆さんの想像をはるかに越えます。今日、小雨降っていました。その小雨の中、防護服を着てびちょびちょになってこの寒さの中ががんばってる。そういった方々に感謝する、感謝の思いを伝えること、それが士気の向上につながります。

彼らの抱える問題の解決には何十年もかかってしまいます。せめて「私たちだけは味方であるよ」ということを伝えてあげないと。今、徳俵で踏ん張っている感じですから、もう少しで負けてしまう。地元の小学生、幼稚園生が感謝の手紙を届けてくれます。大人が感謝の気持ちぐらいは伝えられるはずです。

そして、起きている問題の本質を必ず考察して下さい。東京電力が発表している情報は専門知識がないと非常に読み取りにくいのです。いたずらに不安を感じて、感じたことをそのまま発信することは、原発行動隊の名を貶めることにもなっています。

正しく評価ができないものであれば、専門家に教えるを請うことが必要です。例えば原子力工学を講師に招く。私としては、現地の東京電力社員、特に高卒上がりで何十年も1Fで働いている方が一番適任だと思います。レクチャーを受ける。原子力設備を覚えるところから始まって基礎知識を積み上げた先に問題の本質がやっと見えて来る。

汚染水タンクの堰から水が溢れて溜まったトラブルがあって大問題になりました。でもよく考えて下さい。その堰の周りにだって水たまりがいっぱいあるんです。同じ雨です。堰の中にある水と、水溜まりの放射能濃度は大差なかったんです。大騒ぎをしていた。本来あれは管理上の問題だったんです。水が溜まって溢れさせてしまったという管理不足の問題、それがなぜか放射能の問題、漏洩の問題になってしまった。どうしてああいった管理になっていたんだっていう所を問題にするべきだったんです。

●病院がない

福島第一原発では震災後作業員の方が何人も亡くなっています。なぜあれほど起きてしまうのか。

病院が近くにないのです。以前は大熊町にある総合病院と協定を結んでいました。現在は、いわき市の中心部にある共立病院と労災病院の二つしかありません。福島第一原発で労働者の方が亡くなられたという情報が入った時にまず最初に出たのが「放射能のせいだ」との声。もっと冷静になってよく見ましようよ。救急車で飛ばしても1時間半もかかる先にある病院に行くしかなかったんです。

机上の空論にならないように、現地に足を運んでいただく、もしくは、現地の実情を知っている方を直接招いて勉強会を開いて、解決に向かっていただければと思います。

みんなで手を合わせれば絶対よくなります。誰のために、何の問題の解決のために団体が作られたのか、なぜ自分がそれに所属してるのか、そこをもう一度考え直して欲しいのです。私たちの団体も毎月一回考え直しをやってます。一年前の、団体設立当時に掲げた内容と、今の内容、全く違うんです。そうならないといけないと思います。

●住宅と娯楽施設が欲しい

作業員の方にとって今一番求められてるのは住む所です。いわき市の北の広野町までしか住めません。元々は

5000人しかいなかった町です。田舎ですからアパートにはあまり住みません。一戸建ての家を建てるのが当たり前の地域で、ここに賃貸住宅はほとんどないんです。この町に一時は3000人近く作業員の方がいると言われました。でも住む場所がないんです。プライバシーが保たれるぐらいの賃貸住宅が必要だと思います。

作業員の方たちに何が欲しいって聞くと、居酒屋が欲しいとか、遊ぶところが欲しいって言うんです。TUTAYAのような店がほしいと言われた方もいましたね。単身者が楽しむことができる、本とかビデオを借りてきて、個人の時間をつぶせるような場所が欲しいと。

●福島原発行動隊にできること

作業員の研修はいま民間企業任せになってしまっていて問題に上がっていません。作業員は「研修のために今日はいわき市に行きます」なんて言うとお給料もらえません。必要な知識、経験を作業員が学べる、給与保証込みの研修施設を作るよう東京電力や政府にご提案いただくことも非常に有効だと思います。

労働環境の改善などは皆さんが手をかける場所ではもはやなくなっています。東京電力に、責任をもってやらせなければいけない。

モニタリングがよいと思います。東京電力が宣言してます。「発電所の敷地内の線量下げます」と。皆さんにモニタリングしていただいて、「ちゃんとやってくださいね」と要請する。

皆さんがどんなに頑張っても発電所の中に入れないというのは絶対揺るがない事実ですから、発電所の中のことは東京電力にきちっとやってもらう。それをきちんと監視するというのが皆さんにお願いしたいことです。

一般の人が声を上げて、「東京電力さん、きちんと約束どおりやって下さいよ」と言ってもなかなか届かない。でも、皆さんのような公益社団法人で、国会議員の方もいらっしゃるこういう場所も借りられる力を持っている。そうした立場で政府などにご提案いただけるのは私たちにとって非常に心強いです。

今日はお願いの講演会です。皆さん、力を貸していただけてませんか。若い私たちの力だけでは解決できません。

以上、長くなりましたが、これで私の講演を終わりにさせていただきます。ご静聴ありがとうございました。

■吉川さんの案内で、復旧・復興の現場を知ろう！

福島現地視察のお誘い

原発事故の被災現場の実情と、復旧・復興に取り組む方々の現状を知るために、現地の状況に詳しい吉川彰浩さんの案内で視察を行います。奮ってご参加ください。

▽実施日：12月12～13日（一泊二日）

▽集合場所：12月12日午前11時にJRいわき駅改札口

▽視察コース：国道6号線を北上し、広野町、楢葉町、富岡町、大熊町、双葉町、浪江町、南相馬市

▽宿泊：湯の岳山荘

▽参加費：実費

▽視察時の交通手段：レンタカーまたは小型バス

▽視察ガイド：吉川彰浩氏（AFW）

▽協力：AFW（Appreciate Fukushima Workers）

▽申込方法：福島原発行動隊の事務局まで電話、FAX、メールでお申し込みください。申込締切は11月28日（金）。